


心一つにして ―創立記念日を祝う―

View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by  CORE

provided by Kwansei Gakuin University Repository

そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください。

(フィリピの信徒への手紙 第2章1、2節)

創立記念日を前に、このパウロの言葉を味わってみよう。1889（明治22）年9月28日、兵庫県知事から「書面之趣認可候条相応之教員雇入ノ上開校スベシ」との文書が関西学院に届いた。原田の森を船出し、上ヶ原移転後、私が三田市民なので親しみの湧く神戸三田、ビルの中の箱形の大阪梅田、完成して行く姿を楽しく眺めた宝塚、警戒の厳重な東京丸の内などと校地を拡大した。それぞれ特徴ある景が鮮やかに目に浮かんでくる。

同時に、西宮聖和、千里国際キャンパスへの思いも強まる。これらは、関西学院がさまざまな組織と混ざり合わされた結果ととらえるべきなのか。否、各々は関西学院の一員でありながら独自の性格は当然持っているだろう。私は、西宮聖和キャンパスの穏やかな風情、ダッドレーチャペルの古様な静寂、その中に佇むことが大好きだ（聖和の歴史について、最近『Thy Will Be Done－聖和の128年』が刊行された。良書である）。

未だ訪れていない千里国際キャンパスも個性豊かなものと想像している。不意に、『讃美歌21』412番（1954年讃美歌234A）の第二節が聞こえ始めた。

歴史のながれ 旧（ふる）きものを 返らぬ過去へ 押しやる間に
主イエスの建てし 愛の国は 民よりたみへ ひろがりゆく

両キャンパスは旧きものとして過去に押しやられてはいない。自ら歴史を大切に、関西学院全体の中で生き生きと活動していると思う。すべてはイエスの愛によってつくられた国の中にある。今、お互い個を尊びつつ、充実した将来を心一つにして祈る。それも創立記念日を皆で祝うことになりはしないか。冒頭のパウロの願いとも合致しよう。加えて、この讃美歌の作詞者、由木康（1896－1985）もまた本学の卒業生なのである。

(文学部教授)